

ロス禅センターでの生活

前北米開教師
ロス禅センター駐在員 池沢 紫山

ロスアンゼルスは関東平野と同じ広さだと伝わっています。一年を通して二十日間程しか雨の日がありません。グリフィス天文台から眺める街並はカリフォルニアの青く広大な空の下に区画整理された家々が遠くサンタモニカの海岸まで続いています。ダウンタウンからサンタモニカに伸びるウィルシャー通り。これは米国人が世界一美しい通りだと誇るものです。

そのウィルシャー通りから二区画入った所にロスアンゼルス禅センターがあります。天文台から南を見ると丁度正面に当たります。禅センターは今から十六年前に善光寺御住職黒田武志老師の実兄前角博雄老師が創設されました。ノルマンディー街と九番通りに囲ま

れた一区画を占有し、十三棟の建物に百三十名が居住して前後二つの禅堂を中心にして協同生活をしていました。私は二年間この禅センターで修行し、昨年帰国しました。今年には善光寺様開創十五周年に当たられるとのことです。御住職黒田老師のご紹介で渡米させて頂いた御縁で拙文を寄稿することになりました。

昭和五十六年三月二十三日、根雪の残る秋田からロスアンゼルス空港に着いた時、空から見る街は夕暮れの中基盤状の道路に点々と並ぶ宝石のような車のバックライトが印象的でした。その日迎えに出て下さったのは、一ヶ月前一足先に来ていた開教師の采川先生とこれから同室になるというポール智源さん、そして同

郷の宮尾さんでした。その夜前角老師宅でセンターの主なメンバーが集まり歓迎夕食会をして下さり、機上での不安も吹き飛んだことでした。食事を運んで下さる米国人の尼僧さん達の立居振舞いの見事なことに驚き、堅さのない自然な所作にセンターでの修行の様子を感じとることでした。夕食が済みポールさんの部屋に案内され、きちんと用意されたベットと机を目の前にして、本当に来て良かったなと思いました。

翌朝は四時に起き暁天坐禅をし朝課の後入堂の拝をしてセンターの一員となりました。それから采川さんに連れられてセンターの建物を回りメンバー一人一人に紹介してもらいました。皆の名前を覚えるのに三ヶ月はかかったでしょう。なにしろ英語の名前の他に日本語の安名を使う人も居るので大変でした。まして私にとっては見慣れない米国人達の人相は当初誰を見ても同じ様に感じ、二日目からはメモ帳を持ち歩き、名前と特徴を書き込み乍ら覚えたものでした。言葉については、中学校以来通算すると十年以上も英語を学

んできていることもあって多少自信はあったのですが、正直言つて本場の英語は当初半分以上聞きとれないのにはいささかショックでした。でも幸せなことに采川さんも居ましたしポールさんは日本に一年半滞在していた程の日本通で日本語も話せる人でしたから大助かりでした。彼はUCLAの大学院生で日本佛教を専攻し既に正法眼蔵を翻訳している程日本語に精通していて、逆に私の方が教えられる場面がありました。

センターでの私の仕事は典座寮(キッチン)でした。朝八時半から全員での清掃が済むと九時から午後五時まで百三十人分の食事を用意するのです。野菜食中心で肉は使わず魚も二週間に一度という献立なので、朝食の果物、昼夜のサラダの切り込みが私の主な仕事です。米国風のメニューの他、メキシコ料理、スパゲティ、うどん、みそ汁、そば、炒めご飯等献立は色々工夫されています。人參の切れ端、玉ネギの皮、セロリ、レタスの堅い部分を捨てずにスープのだしに使うところは学ぶべきところでした。材料の仕入れはカー



ル典座長が週に二度朝五時にダウンタウンの中央市場から買ってきます。市場からまとめて直接買うのでコスト安で、例えば六十ヶ入トマト一箱が三ドルで買えます。カールさんによると百三十人分の仕入れ費用は月に約五百ドルとか。ざっと計算してみると一人分一食当たり原価約一ドルとなります。寮員はカールさんの他四十八才になるニューヨーク生まれのクレアさんそしてイタリア系のジュディスさん二十八才を主にトレーニーと呼ばれる短期参禅者が常時二、三人手伝ってくれています。キッチンには道元禅師の典座教訓が掲げられてあり仕事場は常に清潔にされています。さて総受付のある三階建てのパドマハウスと呼ばれる赤レンガ造りのビルの中には、一階にブックストア、法律事務所があり、二階はセンターメディアカルクリニックという診療所、三階は坐禅に使う坐蒲や改良衣を作っている縫製室があります。それぞれセンターの内外の人々に親切なサービスを提供しています。地下にはコンピューター室があり千名余りの会員のデータや年

三度一万部發送しているセンター誌の配布先データが記録されています。その他洗濯室、郵便局派出所がありその隣りにパドマブティックという一画があります。ここにはメンバーがいらなくなった家庭用品、着物、靴、ラジオ、レコード等が並べられてあり、必要な物を誰でも自由に持つていけることになっています。私もずい分お世話になりました。

センターの生活はなんといっても朝と夜の坐禅が中心です。日中は、学校に行く人、会社勤める人、センターで働くスタッフと様々ですが、朝晩の禅堂は老師を中心に黙々と坐る人一色となるのは壯観です。修行道場であり、コミュニティでもあるセンターは、日本的な縦社会ではなく、大人から子供に到るまで、一人一人の個性が尊重されて伸び伸びと思ひ切り修行できる所です。一年中温暖で湿気の少ないロスの気候は坐禅修行に最適です。夏の極暑の時期はともかく、汗かきの私には大変有難いことでした。禅堂の二階にある開山堂には、高祖道元禪師、太祖山禪師の御真像

そして中央に御開山黒田白純老師の御真影を安置し、その前に黒田武志老師より御寄贈頂いた米国で第二番目の御佛舍利がストウパーに納められています。花器には毎日生花が生けられて、尼僧のパールマーさんが毎朝御洗面、献供をしてお仕えしています。

〃往くところ我が家ありけりかたつむり〃という歌があります。初心さえ忘れなければ、何処に行っても道が開けると信じていたことが、センターにきて、決して間違っていないかつたとうなづかせて頂いたものです。お別れパーティーで〃これからセンターの家族の一員として我々と共に精進しましょう〃とってくれた永安さんの言葉を肝に命じて秋田の地で頑張っていると思っております。御世話になりました皆様に衷心より御礼を申し上げ筆を置くことに致します。

合掌

本稿は『成寿』創刊号に寄せられたものですが、紙面の都合上今回掲載となったものです。(編集部)